

▶委員会の趣旨について (近藤)

1つは、専修学校のレベルアップのために情報公開を大々的に行い、一般の方からも学校の様子を見てもらうため。もう1つは各界の方々から、学校に対してのご意見を賜るため。実践専門課程に合格している専門学校は全国で半分かくらい。実践専門課程とそうでない学校として国も区別している。

今年は30周年ということもあり、情報公開をしてよりよい専門学校にしていきたい。

▶開式のあいさつ (理事長)

コロナ禍で大変な時代にお集まりいただきありがとうございます。

様々な意見を頂き、この会が有意義なものになるようお願いいたします。

▶出席者紹介 (出塚)

外部出席者・欠席者 学校側出席者

▶委員長あいさつ (渡辺建太委員)

昨年1年間はコロナの影響が思ったより長く、新潟はいまだに感染者が多い。新年度においてもコロナと戦い、その中でもニューノーマルの実践をしていくことが必要。学校生活でも行い、いい意味で変わっていくように、評価をしてよい委員会にしていきたい。昨年は行事等がなかなかできない中でも巣立っていく卒業生をみて、学校は学生目線で頑張っていると感じた。新年度もコロナに立ち向かって学生目線の良い学校になってほしい。

▶コロナ禍における学習状況において

(学園長)

職員一同の合言葉は「学校から感染者を出さない、持ち込まない」。これを徹底するため、うがい手洗い消毒の励行、マスク、密集密接にならないように努めた。一番の課題は授業だった。昨年は2ヶ月間オンラインで、学生は自宅で作り写真で送った。座学もオンラインで行い、7月から時差登校で、夏休みはお盆以外を登校にした。

その中で気づいたことは、学生が学校に来ることをとても喜んでいる。先生方の授業を食い入るように熱心に聞いていた。また、昨年は一人も中退者が出なかった。学生たちが学びの喜びを知ったからではないか。コロナで体験したことは学生が学校の良さを知れたこと。実習では試食はせず、座学も一定方向を向いて行った。アルバイト先で濃厚接触者になってしまった学生はいるが、罹患はしなかった。県外に行った人は一定期間自宅待機、PCR検査をしてから登校という形をとって感染対策を徹底した。学園祭は事前予約とし行った。卒業式も行い、やってよかったと感じている。先生方の努力と関係者の支援のおかげで学校から

は感染者が出なかった。

▶学校評価の結果 (渡辺真)

2 番目学校運営について⑥ 数字が低い状態が続いている。約 5 年前から情報システム化の構築を行ってきた。今年はコロナ禍でシステムの予算を増やし、さらなる構築をしていく。タブレットを使った授業等。通常の授業の際にさらなる学力の定着を図るために、目的を持つものとして進めていきたい。

「3」教育活動

コロナ禍で大変苦戦を強いられた年だった。その中でも様々な工夫をして授業を行ったことは学生にも伝わっていたようだ。それで満足せずさらなる工夫をしていき、学びを止めない内容を考えていきたい。

たとえば、大きな大会がない場合は学内コンテストを行うなど、学生が喜びをもって学ぶ環境を作っていきたい。

(5) 学生支援

同窓会の設立を行う。30 周年記念事業として取り組んでいく。委員の方からの意見であった、「学食」について、テラスでのサンドウィッチ販売を開始した。学生からも好評。

(7) 学生の受け入れ募集

ニーズに合った広報手段について。学生募集については前年と違い、情報把握がしにくかった。新しい広報手段として YouTube オープンキャンパスや LINE を使った。また、今の高校生は先生の話より、身近な先輩の話に影響されやすい。先輩の動画作成をし、YouTube で配信するなどし、新しい広報手段を作った。

(10) 社会貢献・地域貢献

学園長の講演や、子どもや一般の方向けのお菓子教室が出来なかった。しかし、学園祭は予約制で開催したことで地域の方ともお会いでき、お菓子や料理を通じた地域貢献ができたのではないかと。

また、学園長が監修したもったいないレシピが配布される予定。(フリーペーパー)

このあとも SDG s など取り入れていき、社会貢献をしていきたいと考えている。

学園長もったいないレシピについて

新潟市の依頼で作ったもの。食品ロスをなくすという事で提案したところコンペで勝って選ばれた。この 3 月から市内で配布される。コロナ禍でできないというだけでなく、できないということだけでなく、メリットもたくさんあり、ピンチをチャンスに捉える。30 周年

で新たな飛躍をすべく今後もお力添えをお願いいたします。

来年度の重点目標について（出塚）

⑥の追加。

「新型コロナウイルスの収束の見通しが立たない状況であるが、学校教育においては工夫を凝らし、学生の学びを止めることなく前向きな教育を実践する。」

令和2年度2回目、3年度1回目の開催について。（渡辺真）

6～7月ころに2つを兼ねた会を開催予定。ご要望に応じてオンラインでの開催も対応している。

▶意見交換

（古川委員）

菓子工業組合は現状オンラインの導入はない。今度必要であれば

（理事長）

これからもうしばらく続くかもしれないので対応は必要。

（三島委員）

OB会の創設については？

（学園長）

卒業生のためにも同窓会を作ろう、30周年の記念事業として計画している。

（三島委員）

学生募集については、新潟各学校とも苦戦している。各企業も、横文字にしなければ会社に希望者がいない。漢字を並べたのでは魅力がないのではないか。ある株式会社は、会社名を変え、反響が大きくあった。テレビを3～4時間みていると、調理師学校のCMは2校がさかんにCMをしている。人の口から口への宣伝、一番効果があるのではないか。

学園長のもったいないレシピのピーマン肉詰めはすばらしい。3～4年前の全国で廃棄された食べ物…1世帯当たり6000円の廃棄。1日170円（どんぶりいっぱい）のごはんを捨てている。こういう点からみても、このもったいないレシピは素晴らしい。これからはこのような取り組みが大切。うまいものを作るのは当たり前の話。食材そのものは有資源。

（渡辺建太委員）

もったいないレシピのような、SDGsの取り組みが大切。具体的に製菓と調理の学校において何ができるのか。これからの世の中大事だと思った。コロナを克服したとしても、新しい普通になる（ニューノーマル）今まで以上に取り組んでいただきたい。

（山岸委員）

先程の動画、学生の意見を取り入れて作ったというのは非常にいいこと。若い人たちの考

え方は感性そのものが違うため、若い人の感覚を大事にするのが大切。どんどん取り入れて、物事に果敢に挑戦していき頑張っていってほしい。

(神子島委員)

今の燕市の現状、、、今本当に売れているものはキャンプ用品、家庭用品、医療関係のもの。ほぼそれしかないような現状。キャンプ用品をやっている会社で、20名ほどの社員で15億売り上げて伸びている会社もある。逆にキャンプ用品はあと1~2年で終わるのではないかとされている。趣味でやっていた人がインスタにあげて、それを見たほかの人が興味を持つことによりブランド化する例もある。SNSを活用し、ユーチューバーとコラボして売れるものが売れる。本質を見抜けない方が沢山いる。「何が売れる」、よりも「売れているもの」が良いもの。お菓子や食べ物もユーチューバーが宣伝すれば売れる現状で、せっかく学校に通って実際に作って食べているので、「これが本当のお菓子なんだよ」と基本を教えたいので、売れ方を教えてあげるとこの先何かのヒントになるのでは。若い人は何を考えているのか、何も考えていない、たった今の事、明日のこと、くらいしか考えていない可能性がある。えぷろんに来る学生は夢を持っていると思うので教える側も楽なのではないか。何も考えていない人は何を教えても何も覚えないので、そういう人でも使えるシステムを作る。これからは同じ組織の中でもどうなりたいたいのかを具体的にしていって教育をしていくと良いのでは。

(近藤委員)

三島委員から3年ほど前に同窓会の意見があった。その声をもとに同窓会立ち上げるので評価委委員会の意見を出来るだけ取り入れたい。

(渡辺建太委員)

SDGsは持続可能な社会を作っていくという事。少子化の中でえぷろんは地域に根差し夢を持った学生を育てるということで、このSDGsも取り組みの中で掲げてほしい。

(学園長)

レポートを見ると、食育活動でイナゴを捕まえて食べたことを書いている学生が何人かいた。昆虫食について興味を持っていた。そのような課外活動も大切。

(渡辺建太委員)

昆虫食について、動物よりコオロギの方が二酸化炭素排出量が少ない。例えば、コオロギパウダーというものがある。引き続き日々の中でやってあげると良いのでは。

(三島委員)

これからの調理師学校として、何をすべきか。これからは新しい感覚で学校運営をしていくことが必要。若い人の教養や士気を磨いていくことが大切。三川のお米・・・学園祭のお弁当を開けて一番最初に気づいたのは白いごはん。米の炊き具合もよく、素晴らしかった。本来ほかの料理が目立ってほしかったがほかの料理が暗かった。そのほか、ハンバーグの彩どりはキャロットグラッセだったが下に入ってしまったので上に持ってくるとよい。つまり印象に残る料理を作ることが必要。

子どもの頃は、イナゴを捕まえることが子どもの仕事でもあった。また、新潟では今年 A ランクのコシヒカリが出ている。等級の違いは耕盤で米のうまいに関係している。お米を生徒に教えるとき、何時間でもいいからプロを呼んで具体的に説明すると、料理だけでなく素材の原点から教わったという事になる。農業やったから野菜がどうなるなど、、、どうして育つのか、こういう風にした方が美味しい、など。

(古川委員)

同窓会は OB・OG の力を借りた何かをできればよいと思う。

(山岸委員)

これからの学びや仕事は紙ベースではなくデジタル化されているため、色々な対応がいる。先輩の仕事ぶりは経験も知識もあり、お客さんもベテランの知識が安心感がある。しかし新しい感覚で物事を見ている人は仕事のやり方を「こういうやり方があるんだな」と見ている。いろいろな経験を若者に伝えるのも大切、感性の持ち方も大事にしてもらえたらと思う。

(理事長)

3000 人以上の卒業生がいるが、えぶろんの卒業生という声が少ない気がする。外部の人たちがもっと声を上げるとよいのではないか。

(近藤委員)

委員の皆様のご意見をきいて感じたことは、今 NHK の大河ドラマで渋沢さんの「現状維持はむしろ下がることなんだ」という言葉を改めて感じた。意見をぜひ生かしていきたい。